薔薇田迎児(ばらだ・げいじ)は二十四歳の男子だ。身長170で体重が90キロ、胸囲100センチ、見るからに逆三角形のマッチョマンだ。浅黒い肌に鼻の下だけヒゲを生やしている。空手が特技であるけど、福岡市の地方公務員をしている。家が代々、公務員の家系、しかも福岡市の地方公務員なのだ。

薔薇田家の長男で、下には妹が一人。妹は航空会社の客室乗務員でミニスカートを履いて勤務している。

公務員はキッチリ、五時に帰れるので薔薇田迎児は暇をもてあましていたが、ある遊びに目覚めてからは充実した日々を送っている。

その遊びとは、帰宅しているフリーター、多くは自転車に乗って家に帰っているフリーターに、

「おい、君。」

と呼びかけるのだ。タクシーを呼び止めるように右手を高く上げて、自転車に乗って足を動かせているスポーツのクラブ活動を終わったような男子に声を掛けるのだ。

「は、はい。ぼくですか?」

戸惑ったようにフリーターは答えた。迎児は、

「そうだ。君だ。自転車など漕いでいるけど、お金、欲しくないか?」

「ほしいですよ、それは。でも、フリーターで十八になったばっかりだから、いいバイトはないし。」

と答えた男子に迎児は笑顔で、

「はっ、はっ、はっ。普通は、なかなか、ないよな。だから僕が募集するのだよ。」

「えっ、バイトさせてくれるんですか、うれしいな。」

「よし。やる気だね。場所は、あそこの公園の中だよ。」

「掃除か、なにかですか?」

「そうだねー、綺麗に拭き取ってくれたらいい。」

「なら、やりますよ。自転車、ゆっくり漕ぎます。」

「そうだ。行こうか。」

二人は陽が落ちて暗い夜道を微かに明るい公園に向った。広めの土地だが誰もいないし、便所が男女に分かれてある。

薄暗い中を二人は公園の入り口に到達した。自転車を停めた青年に迎児は、

「便所に行こう。」

と優しく、ゆっくりと誘いかけた。

「あ、もしかして便所掃除ですか?」

暗い空間で青年の目は猫のように光った。迎児は余裕綽々と首を軽く前に振ると、

「まあ、そうだな。出るもの所構わずとか、いうだろ?」

「はあ。ま、お金がもらえれば、いいです。」

青年は迎児より少し先を運動靴も軽やかに滑らせて、結構モダンな公園の便所に歩いて行った。

星降るなどという形容詞は、一体何処の田舎を叙述しているのかは今日、解明されるものではないが今日の福岡市でそのような夜など、原始時代に逆戻りしない限り見ることはできない景観であるだろう。

やはり、排気ガスは規制しても微量に空間を上昇する。よって人口百五十万人の都市における夜空は、かつての日本でおこなわれた月見などという古雅な催し物など何人たりとも行い得ない状況を現出しているのであり、自然そのものを楽に享楽しえた時代は既に遠く記憶の彼方でさえ見出しえないものとなり、テレビからパソコンの動画へと移行しつつある現代において旧石器時代の人類のようなテレビ

人間の夜の行いとしてさえ月見は敢行しようとするものは、いないのである。

それ故に夜の公園など人影は薔薇田迎児と青年だけであった。青年は男子専用の便所をひとわたり眺め渡すと、

「掃除する用具が、ないっすよ。」

と迎児に報告するかのような口調で話しかけた。迎児は筋骨逞しき両腕を組むと、

「馬鹿だなあ。君の体で掃除するんだ。」

「へ?どうやって、ですか?」

迎児は青年に近づくとフリーターの白いシャツの上半身を抱きしめ、すばやく顔を少し下に下降させ、青年の唇を奪った。その味は、魚肉ソーセージのような味だ。迎児は唇を擦り付けて、男子フリーターの口を堪能した。意外にも、そのフリーターは迎児に抵抗しなかった。迎児はキスを続

けながら、右手をフリーターの肩から背中、そして黒い長ズボンの尻に到達させた。男の尻とはいえ、まだフリーターなので幾分の柔らかみが残存して、むず、と掴むとフリーターは、

あ、よさそうだ

と感じた顔をした。すでに迎児の男根は半分硬直していた。この事実こそ、すべての女性の儚い幻想をあざ笑うものなのである。すなわち、男って自分を愛しているからチンポを立てるんだ、という傑作な夢想の事である。きっと白馬に乗った王子様が夜中にやってきて、自分の寝ている前に立ち、チンコも立ててくれるという夢想もしばしば、しつつ夜毎オナニーに耽っている肉食系女子の諸君、諸君等は現実を見極める必要がある。迎児の初体験は二十六の歳にソープランド嬢と、であるからだ。

迎児の右手はフリーターの股間に伸び、小さなテントを張っているのを確認した。唇を外すと迎児は、

「おまえ、スポーツ活動は何をしている?」

とフリーターを少し見下ろしつつ尋ねると、

「剣道です。・・・。」

と俯き加減で答えた。彼の目は迎児の股間を見ていたのだ。そこは、ものすごく膨れ上がっていた。まるで、大きなシャモジがズボンの中に入っているように。

「ほう。剣道とは又、いいな。スポーツというより武道というものだ。そこでだ、ズボンのチャックを降ろして、パンツからチンコを出してみろ。」

「ええっ?恥ずかしいな。」

「恥ずかしいものではない。女にも、いずれ見せるんだ。首相だって、プライベートでは夫人にチンコ見せたり、多

分、しゃぶらせたりもするだろう。それでもな、選挙運動の時は、女房に毎晩チンポしゃぶらせてますので、どうか一票お願いします、なんて言うわけがないんだ。だからな、おまえが明日、職場に行ったからといって、職場の誰にも今の事を話す必要はない。わかるだろ?」

「はい。よくわかります。学校の先生よりも分かりやすい話ですね。」

「なら、すぐにチンポ出せよ。」

「はい、今すぐに出します。」

フリーターは制服の黒いズボンから白いパンツの切れ込みより、硬くなりかかった陰茎を出して見せた。それはまだ発育途中のもので、やや黒ずんでいた。迎児は、

「ほう。なかなかだな。それでは、おれのを見せよう。」

迎児の私服のクリーム色のズボンの股間から巨大な陰茎が

現れた。キノコかと思うほど、亀頭がデカい。迎児は、そのデカブツをフリーターの半立ち陰茎に軽く当てて剣道の鍔迫り合いみたいに陰茎同士を交えた。すると途端にフリーターの陰茎は、しなびたのだ。迎児は、

「おや、もう萎えたね。」

「はい。あなたのモノがあまりにも偉大だから。」

「ハッハッハッ。そんな遠慮はしなくていい。チンコ剣道を教えてやろうかと思っていたのに・・・。」

「そのうち、教えてください。でも、今は駅弁で僕を抱いてほしいです。」

とフリーターは迎児を見上げて告白する。

「ああ。いいよ。尻の穴は初めてかね?」

「いいえ。剣道部の顧問の先生に犯されました。」

「大学の先生か?」

「はい。ぼくの大学には武道場があるんですが、顧問が或る日、

『剣下(けんした)、今年の新人では、おまえが一番見どころがある。先生が特に稽古をつけてやるから、終わった後も残っていなさい。』

と言いました。先生は四十代で独身の大男で腕は丸太のようなんです。おまけに、その腕には毛がいっぱい生えていて、なにか動物の手のような感じです。先生は、いつも見ているだけで時々、防具をつけずに防具をつけた三年生と稽古します。当たったら竹刀でも相当痛いと思いますが、先生は三年生でも素面、小手なしで一本を取るんです。」

迎児の肉棒はまだ、そそり立っている。夜風が吹いて迎児は自分の陰茎を心地よく感じた。フリーターの剣下のモノは、かなり小さくなっていた。迎児は目で話の続きを促し

た。剣下はパンツからチンコを出したまま、

「先生の言いつけどおり、みんなが帰った後も剣道の防具をつけたまま道場に立っていると、顧問の先生が僕に近づいてきて、

『剣下、防具をつけたまま、四つん這いになって尻を高く突き出せ。』

と命じました。ぼくは、すぐにその場で四つん這いになって尻をできるだけ上に上げたんです。すると先生は袴の中から勃起している巨大なソーセージを右手で掴んで中腰になり、ぼくの目の前に松茸のような亀頭を突き出すと、

『剣下、おれのものをしゃぶれ。』

と悠然と命じました。ぼくは口を開いて先生の肉茎の亀頭を口に含むと、それは男性の匂いに満ちていたし、あまりこんなこと、普通の男子フリーターはしないだろうな、と

思いました。変態、のように考えられているけど、でも、女のオマンコを舐めるのだって、似たようなものじゃないですか。

ぼくは一週間前、剣道部の三年生の女子の主将のオマンコを舐めさせられましたから。そしたら今度は顧問の先生の匂いの強いチンコでしょう?先生は、

「おお、うん。おまえの舌使いは中々良さそうだな。女のマンコをもう、舐めたような動きが出来るんじゃないのか。おれの亀頭を舌で色々な角度から、舐めろ。」

ぼくは先生の言ったとおりに自分の舌を動かしてみました。先輩の三年生、女子のマンコを舐めるのを思い出して。すると先生は、

「おおっ、たまらん。いきそうになる。この前、行った中洲のソープの女のオマンコを思い出すな。このままでは、

おまえの口の中で射精しそうだよ。引き抜くからな。」

すぽっ、と音を立てて先生は僕の口から大きなフランクフルトソーセージを抜いたんです。それからススッ、と剣道の足捌きで僕の背後に回りました。

後ろから先生の声がします。

「剣下、アナル処女ってあるけどさ。おまえはまだ、アナル童貞、いやアナル処男(しょお)かな、しょだんとも読めるし、これから剣道初段にしてやるけど、上達のコツを教える。」

ぼくは何か嬉しかったです。剣道は好きで入部しましたから。

「剣下、パンツを脱いで袴をまくり、尻を突き出しなさい。そのあとで、又、四つん這いになれ。」

(へ、それが剣道の上達と何の関係があるのか)

とぼくは思いましたけど、なるべく早く言われたとおりにしました。突き出された僕の尻を見て先生は、

「おう、なかなかの尻だ。こうするんだよ、めーん!」

裂ぱくの気合とともに、先生の巨根は面打ちのように僕の尻を打ちました。それは男の肉と肉が、激しく打ち合う音だったのです。ばちん、と。

先生の声が、

「どおーっ。」

と気合をかけると、ぼくの右側の尻が先生の巨根で打たれました。息つく暇もなく、ぱしーっ、と次にぼくの左側の尻が肉の衝撃を感じて、両側の尻が先生に打撃されました。

(次は、あそこにくる!)

ぼくは思ったんですが、先生は四つん這いになって右手を道場の板についているぼくの、その右手に屈みこんで、

「こてーっ!」

と気合をかけて、ぼくの右手首を自分の勃起したチンコで打ちました。ぼくは、その痛さに、

「ああっ、痛い。」

と声をあげてしまいましたが、先生は、

「自分のチンポも、こうやって武器になるんだ。剣聖・宮本武蔵は養子の伊織の尻を使って晩年、剣の練習をしたらしい。それが、今のやり方なのだよ。」

「宮本武蔵って二刀流の武蔵ですか?」

「そう。生涯、試合で負けなかったというが、新たな剣を求めていたのだな。それが、つまるところ自分のチンコが剣になると武蔵は気づいたらしいね。」

「そんな話、初めて聞きました。」

「そうだろうな。何せ、秘伝なのだよ。一子相伝として伝

わってきた。たまたま、熊本で教師をしていた時、家庭訪問に行った家が、その天心無一二刀流という正伝の武蔵の伝えた剣法の家であったということだ。

ぼくもね、大学生剣道日本一とかになって、卒業してすぐの頃だから、その宮本破天斎先生も、僕の事を知っていて、

「あなたには見込みがあるから、武蔵の秘伝を教えましょう。」

と言われた。それで道場に連れて行かれて、今の君みたいに四つん這いになって尻を出したんだ。その最初の教えが、それだ。」

「そんなに貴重なものなのですか。」

「ああ、それは金を取られなかったが、結局秘伝伝授料は一千万円だった。五百万円は親父に出してもらって、あとはローンで払ったけどね。」

「ひえーっ。そんなに高いんですね。」

「そんなものだろう。武蔵は大刀を使うのが得意で、二刀を持てるのも武蔵ぐらいの腕力がないと出来るしろものではないね、二刀流は。

何せ、佐々木小次郎との試合では舟を漕ぐ櫂を削って木刀にしたという逸話の持ち主だ。

その武蔵が晩年、考えたのが、もし、素手の時、敵に襲われたらどうするかということだったのだ。答えは自分のチンコを使う、という結論だった。どうも、晩年の武蔵は巨根に自分のチンコを改造するのに熱中したらしい。そのために熊本城下の青年の尻の穴を利用していたという肥後の密談もある。昔の武士はよく青年の尻の穴を使って満足した。というのも、戦となると女を連れて行けないだろう。

だから、殿様の中には、お気に入りの青年、しかも美青年

を侍らせていたのは周知の事実なのだよ。

織田信長は森蘭丸の尻の穴を使っていただろうし、豊臣秀吉も一度くらい、自分の尻の穴で主君、信長に奉仕しただろうね。豊臣秀吉には信長の冷たくなった草履を自分の懐で温めていた、という有名な話があるけど、その続きは知られていない。信長は、

「猿、あっぱれなやつじゃ。だが、わしの体も冷えておる。」

「殿、それは何処でございますか。」

と秀吉は問い返した。信長は笑って、

「わしのチンコじゃよ。最近、いい稚児が見つからんでな。」

「ははーっ。殿、よろしければ秀吉の尻を、お使いくださりませ。」

「よし、顔は猿のおまえじゃが、尻の穴は締るやもしれぬ。次の戦で勝ったら、その国は、そちのものじゃ。寝床に参れ。」

「ははーっ、殿。ありがたき幸せ。」

それから信長は秀吉の尻の穴を使ったらしい。」

「へーっ、そうだったんですね、先生。」

「ああ、そうさ。歴史なんてね、性の部分は隠してしまうけど、色々と面白い実話は子供の教育に悪いからね。」

ぼくは先生のチンコを見ました。すると長話をしていたのに、まだ勃起しているんですよ、先生のチンコ。ぼくの視線に気づいたのか、先生は、

「剣法とは体で体得するものなのだ。つまり、」

そこで先生の姿は見えなくなりました。と同時に僕は、尻の穴に太いソーセージが入った感覚を感じ、

「ひやっ。」

と声をあげたんですが、それは勿論、先生の勃起したものでした。うんこが、はさまったような気もしますし、何か妖しげな感覚で尻の穴って意外に感じるものがありました。先生は、

「突きーっ!」

と気合をかけたのです。そう、突きがまだ、残っていました。腸の方に、うんこが逆流するような感覚はジェットコースターに乗って下に急降下するような気分でした。それは先生の固いチンコが鋭く、ぼくの尻の穴の中で前進したからです。先生は、

「又、戻して突くからな。」

と話すと、ぐーっと勃起肉を引き抜く直前までにして再び、

「突きーっ!」

と気合をかけて、ぼくの尻の穴の中に急速に固いチンコを挿入します。その時に感じる感覚は、次第に快楽のような甘みを覚えるのです。ああ、女の人って男にマンコをチンコで突かれて、こんな風に気持ちいいんだ、と思いましたよ。だから、ついにゲイの男性は相手と結婚するまでになるんでしょうね。」

フリーターは夜風に公園の便所でチンコを柔らかく吹かれながら、迎児を見上げた。それは女の目だと言ってもいい。